

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02441

研究課題名（和文）リスクを伴う外遊びが幼児の発達に及ぼす影響：保護者と保育者の意思決定過程の解明

研究課題名（英文）The effects of risky outdoor play on the development of young children: elucidating the decision-making process of parents and care practitioners on early childhood education

研究代表者

杉村 伸一郎 (Sugimura, Shinichiro)

広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授

研究者番号：40235891

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：子どもの外遊びにおいては、保護者や保育者が、可能な限りの安全を目指すよりも、適度なリスクを受け入れる方が、子どもの健康と発達を促進することが明らかになりつつある。しかし、「リスク」という用語の使い方が統一されておらず、リスクを伴う外遊びにより諸能力がどの程度発達するのかも明らかではない。さらに、子どもの外遊びのリスクとベネフィットを総合的に判断する方法も具体的に示されていない。そこで、本研究では、「リスク」概念の整理を行い、ベネフィット・リスクアセスメントの進め方のフロー図を作成するとともに、子どものリスク管理の実態を判断課題と観察により明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

過度な安全性の追求はかえって健全な発達を阻害するという問題は、2011年の日本学術会議の提言「我が国の子どもの育成環境の改善にむけて」でも盛り込まれ、極めて重要であると認識されている。リスクを伴う外遊びの価値を保護者や保育者に伝えその機会を増やすには、リスクを伴う外遊びが子どもの発達にどのような影響を与えるといったエビデンスを示し、その上で家庭や園において子どものリスクを伴う外遊びに対する意思決定を行ってもらう必要がある。そのためには、エビデンスの蓄積と意思決定過程の解明が急務であり、本研究の成果はリスクを伴う外遊びの価値ならびに機会の向上に寄与する。

研究成果の概要（英文）：In outdoor play for children, it is becoming increasingly clear that parents and care practitioners on early childhood education can promote children's health and development by accepting a moderate level of risk rather than aiming for the greatest possible safety. However, the use of the term "risk" is not uniform and the extent to which various abilities of children are developed through risky outdoor play remains unclear. Furthermore, till date, there is no specific method to comprehensively determine the risks and benefits of outdoor play for children. Therefore, this study, aimed to clarify the concept of "risk." It also developed a flow chart of how to proceed with benefit-risk assessment; it further revealed the realities of children's risk management through judgment tasks and observations.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児 外遊び リスク 怪我 発達 保護者 保育者 意思決定

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

子どもは遊びを通して成長・発達していくと考えられている。しかし、遊びにより怪我や事故が発生し、時には死に至ることもあり、社会的な問題となった。その後、子どもの安全を守り怪我を防止するという意識が高まり、保育現場等でのリスクマネジメントが普及するにつれて、新たな問題が発生した。過度な安全性の追求は、かえって健全な発達を阻害する、と考えられるようになってきた。

屋外で高い所に登ったり高い所から飛び降りたりといった、リスクを伴う遊びを行うことは、子どもの健康と発達を促進することが明らかになりつつある。そのため海外では近年、可能な限りの安全を目指すのではなく、必要に応じて安全を考慮し、リスクを伴う外遊びの機会を増やすことが提唱されている。

日本の子どもが置かれている状況も同様であるが、保護者や保育者がリスクを伴う外遊びを受け入れるには、リスクを伴う外遊びにより、諸能力がどの程度発達するのか、怪我がどの程度発生するのか、といった基本的なエビデンスが不足している。また、「リスク」という用語の使い方が統一されておらず、子どもの外遊びのリスクとベネフィットを総合的に判断する方法も具体的に示されていない。

### 2. 研究の目的

上記の学術的背景に基づき、本研究では、保護者と保育者がリスクを伴う外遊びに関する意思決定を行う際に、重要な役割を果たすと考えられるエビデンスを蓄積することと、リスクを伴う外遊びに関する意思決定の過程を明らかにし、保護者と保育者向けの啓発資料を作成することを目的とした。

### 3. 研究の方法

2020年度以降、新型コロナウイルスの感染状況等を鑑み、当初の研究目的や方法を、研究対象者に負担にならない形に変更した。その結果、下記の目的と方法で研究を実施した。

(1) リスクのある遊びは、スピードを出す遊び、危険な要素のある遊び、危険な道具を用いた遊び、高さを伴う遊び、失踪する可能性がある遊び、乱闘遊びの6つに分類される (Sandseter, 2007)。本研究では、失踪する可能性がある遊びを除いた5つの遊び(すべり台、ブランコ、相撲、坂のぼり、ノコギリの使用)を取り上げ、リスク認知の発達的变化とともにリスク認知の判断材料やリスクテイキングに関しても検討することを目的とした。そのために、通常の遊び方(すべり台の場合、座って滑る)とリスクのある遊び方(立って滑る)を左右に描いた用紙を3~6歳児73名に提示し、それぞれの絵で描かれた遊び方をするかどうかを尋ねてから、「どっちが危ないと思う」と質問し、その理由等を尋ねた。

(2) 幼児がリスクを伴う遊びを行っている場面で、どのようにリスク管理を行っているのかを、メタ認知と自己調整学習を組み合わせて作成された枠組み (Whitebread et al., 2007) を用いて検討した。幼児62名(年少20名、年中19名、年長23名)を対象とし、2021年10月~12月に登園後と昼食後からの自由保育の時間に、リスクのある遊びを行っている幼児をビデオカメラで撮影した。撮影時間の合計は約10時間で、年少児34事例、年中児42事例、年長児32事例が収集された。

分析は、Whitebread et al. (2007) の枠組みを藤・杉村 (2022) が改変した分類表を用いて行った。まず、メタ認知的知識、メタ認知的調整、情動的・動機づけ的調整に分類し、その後、下位分類として、メタ認知的知識は「人に関する知識」「遊びに関する知識」「遊び方に関する知識」の3段階に、メタ認知的調整・情動的調整は「プランニング」「モニタリング」「コントロール」「評価」の4段階に分類した。

(3) 幼児教育において自然環境は遊びを豊かにすると言われているが、その認知過程に関する研究は国内でほとんど行われていない。そこで、環境の情報の知覚と利用・形成という過程を記述するために、アフォーダンス概念に基づいた分類枠組みを導入し、幼児62名(年少20名、年中19名、年長23名)を対象に18回観察を行い、135事例を収集した。

(4) 「危険」や「リスク」という概念の整理ならびに国際標準化機構のガイドライン ISO4980 を参考にしたベネフィット・リスクアセスメントの進め方の整理を、プレイグラウンド・セーフティ・ネットワーク代表の大坪龍太氏とともに行った。

(5) 保育中のリスクを伴う遊びにおける対応の判断の実態を明らかにするために、保育所、幼稚園、認定こども園などに勤務している保育者 500 名を対象に、インターネット調査を実施した。具体的には、保育中の遊びにおいて、保育者が、遊びを許容するか、それとも、制止・禁止するかの判断に迷うのは、どのような場面なのか、なぜ迷い、迷った際にどのように対応しているのか等に関して、自由記述を中心に回答してもらった。現在データの分析中である。

(6) リスクを伴う遊びにおける保護者の言動に関する調査を実施した。この調査では、保護者のリスクを伴う遊びに対する態度だけでなく、子どもが挑戦した後の言動が、子どもの発達と関連すると予想し、子どもがリスクを伴う遊びに挑戦し、失敗や成功した場合に、どのような言動をするかを、理由とともに尋ねた。対象は 2 歳から小学 1 年生の子どもをもつ保護者 846 名であった。現在データの分析中である。

#### 4. 研究成果

上記の方法に対応した成果は、下記のとおりである。

(1) リスクのある遊びを選択(リスク認知)した子どもの割合を集計した結果、坂のぼりでは年少児の正答率が年中児や年長児に比べて低かったが、それ以外の遊びでは年齢間の差は見られなかった(すべり台やブランコでは年少児でも正答率が 90%前後、坂上りは年少児 33%、年長児 71%)。しかし、リスクのある遊びをする(リスクテイキング)と回答した子どもの割合を調べたところ、どの年齢群もリスクのある遊びをあまりしないという結果であった。

次に、リスクのある遊びを危ないと判断した理由を集計した結果、すべり台では、年長児は年少児や年中児に比べ「立って滑ると転んで頭を打つから」という理由を述べる子どもが多く、坂上りでは年長児は年少児や年中児に比べ、細い木につかまると「折れる」という理由を述べる子どもが多かった。そして、リスクのある遊びをすると回答した割合が他の遊びに比べて高かった坂のぼりにおいて、リスク認知ができる子どもほどリスクのある遊びをしないことが示唆された。

表 1 各年齢の 1 時間あたりの自己調整的言動の回数

	年少	年中	年長
総数	154.37	150.01	158.45
メタ認知的知識	3.94	3.55	5.96
人に関する知識	1.31	0.36	0.00
遊びに関する知識	1.64	2.49	4.69
遊び方に関する知識	0.99	0.71	1.28
メタ認知的調整	116.60	116.60	107.34
プランニング	0.33	0.71	2.56
モニタリング	25.29	36.26	32.37
コントロール	90.65	78.56	71.98
評価	0.33	1.07	0.43
情動的・動機づけ調整	33.83	29.86	45.15
プランニング	3.28	1.78	1.28
モニタリング	22.01	20.97	37.48
コントロール	7.88	6.75	4.69
評価	0.66	0.36	1.70

(2) 各年齢の 1 時間あたりの自己調整的言動の回数を表 1 に示した。「遊びに関する知識」、メタ認知的調整の「プランニング」、情動的・動機づけ調整の「モニタリング」は加齢とともに増加した。これは、年齢が上がるにつれ、遊び体験が積み重なり、遊びの中での知識の表現や、遊ぶ前に計画を立て、遊びに対する感情表現が多くなることが示している。その一方で、メタ認知的調整の「コントロール」や情動的・動機づけ調整の「プランニング」「コントロール」は加齢とともに減少する傾向があった。また、「遊びに関する知識」の回数は、年長児では保育者が遊びに関与しているときの方が多く、年少児と年中児では保育者が関与していないときの方が多かった。

(3) 機能的分類法 (Kytta, 2002) に基づいて整理した結果、「掴みやすい/遊離物」が最も多く遊びを誘発(拾う, 集める, 投げる等)していたことが明らかになった。また、アフォーダンスのレベルの分析から、知覚されたアフォーダンス(66 種類)の多くは利用されていたこと(59 種類)、アフォーダンスの知覚が遊びのきっかけを生み出し、アフォーダンスの利用により新たなアフォーダンスが形成されること、幼児は自然環境を否定的ではなく肯定的に体験していること等、が示された。

(4) 遊びにおける危険性のスペクトラムとベネフィット・リスクアセスメントの関係を図にまとめるとともに、ベネフィット・リスクアセスメントの進め方フロー図を作成した。これらは、一般社団法人日本公園施設業協会が発行している「仲良く遊ぼう安全に」というパンフレットの一部に反映されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石田紀香・杉村伸一郎
2. 発表標題 リスクのある遊びにおける幼児のリスク認知とリスクテイキング
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉村伸一郎・上山瑠津子・平川真・倉盛美穂子・平田香奈子
2. 発表標題 リスクを伴う遊びに対する保護者の価値意識と幼児の発達との関係
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村伸一郎
2. 発表標題 幼児のリスクマネジメント能力
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上山瑠津子
2. 発表標題 スリルのある遊びに対する親の認識とかかわり方，そして子どもの発達との関連
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村伸一郎
2. 発表標題 幼児におけるリスクを伴う遊びの価値：リスクの川を渡るにはどのようなエビデンスが必要か？
3. 学会等名 第18回認知・発達フォーラム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関